



なつね
和田 夏音 さん

●葛生小学校6年

夢見るみんなの笑顔

わたしの将来の夢はパティシエールになることです。

わたしはデザートを作ることが好きで、特に、盛りつけをする作業が大好きです。ときどき失敗することもあるけれど、その失敗を次に生かし、もっとおいしい物を作ろうとがんばっています。そしていつか、たくさんの人が笑顔になってくれるようなデザートを作っていきたいと思っています。これからも、パティシエールになるというわたしの夢に向かって、一生けん命がんばっていきたいです。



佐野ブランドキャラクター
さのまる

**市長からの
メッセー**

春を告げる桜の花も咲きはじめ、市内あちこちでお花見を楽しむ姿が見受けられるようになりました。心躍る春、皆さんはいかがお過ごしですか。

さて、先月の市議会において、平成29年度予算を承認いただきました。一般会計予算465億9千万円のほか、各特別会計、公営企業会計などです。今年度予算規模は昨年度並みで、特色としては、交流人口・定住人口を増加させて、地方創生を更に進めて行くことを考えた予算となっております。

個別事業では「しごとづくり」に対し、物流拠点としての本市の地位を高め、地域産業の活性化と雇用の確保につなげるため、佐野インランドポートの完成、稼働に向けた予算、並びに企業立地の促進等に関する予算を計上しました。また、教育・子育て環境の充実に向け、田沼西地区小中一貫校の整備や界小学校校舎増築、(仮称)高萩・若宮統合保育園の建設、並びに「こどもクラブ」の増設などの事業も盛り込まれております。この他「新しいひとのながれづくり」として、11月に全国山城サミットを開催し、全国各地から集結する歴史ファン・山城ファンを「おもてなしの心」でお迎えすることで、本市の魅力を発信し、観光誘客につなげてまいります。

今年度は、本市の最上位計画である総合計画の最終年です。これまでの進捗状況を検証し、さらに本市が発展していくための「次期総合計画」を策定してまいります。

4月は入学式、入社式など夢や希望に向かって新たなスタートを切る季節でもあります。人との出会いを大切に、常に前を向いて進んでいただきたいと思います。花冷えの季節、市民の皆さんには体調を崩さぬよう、ご自愛ください。



今回の表紙 「くまモン、さのまるの日イベントに来訪」 2月25日撮影

佐野市役所周辺で行われた第1回さのまるの日イベントに、熊本県のキャラクター・くまモンが来訪し、さのまるの誕生日をお祝いするとともに、熊本地震の復興支援に對しての感謝を示しました。

よぎ
與儀 和弘 さん
(松井町)



キラリ★
話題の「ひと」

○プロフィール
昭和46年生まれ。
平成6年、現在の青藍泰斗高校(当時・葛生高校)の地理・歴史科の教師として赴任。吹奏楽部の顧問に就任し、尽力。

吹奏楽を愛して

吹奏楽の指導に熱い思いをぶつける
與儀和弘さんをご紹介します。

名前から察するにやはり、お父さんの出身が沖繩ということでした。ご本人は東京生まれの埼玉育ちで、平成6年に大学を卒業すると同時に縁あって青藍泰斗高校に地理・歴史科の教師として赴任されました。中学時代の恩師の影響で吹奏楽に目覚めて以来、「いつか自分も指導者になりたい」という夢を持っていたこともあり、赴任されてすぐに同校の吹奏楽部顧問に就任されました。

昭和16年に創部された長い歴史を持つ吹奏楽部ですが、與儀先生が指導を始めた当初は、甲子園を目指す野球部の応援のためだけに練習しているような状況で、8月が終わると翌年の4・5月まで休部してしまう状態だったそうです。

そんな吹奏楽部に対して先生の熱い指導が始まり、やがて実を結びます。同校吹奏楽部は40人以下の小編成B部門に属しますが、今では東関東大会、東日本大会を経験し実績を重ね、マーチングバンドに関してはハードルの高い条件の中、県代表として東関東大会に13回連続出場されています。

そんな吹奏楽をこよなく愛する先生の素顔はアイドルが好きだったり、車(スポーツカー)でのドライブが趣味ということですが「今では無理ですね。何年も休みがとれずできないんです」と、それでも笑顔で満足そうに話されます。

大きな大会を目標にするだけでなく先生は「地元に着した活動がしたい」と、毎年3月に一年間の集大成として、葛生あくとプラザを会場に定期演奏会を続けてこられ、今年の3月11日には第12回公演を迎えました。「吹奏楽を通じて地元の方とのコミュニケーションを増やしたい。ミニコンサートを増やして地元の活力として発信していきたい」と意欲を燃やします。

趣向をこらした演奏会は毎年、手拍子あり笑いありと、演奏する側も聴く側も楽しい時間を分かちあえるひと時です。こうした姿が先生が望む、地元に着した姿なのだと思います。

(市民記者 山崎ちか子)



ジッカやオーゾは、程度や数量の非常に多いことをいう

数量の多さや程度のはなはだしさを表す語は、共通語にも方言にもたくさんあります。方言ではその代表的なものに、シコタマ・ジッカ・オーゾ・カトーなどがあります。これらの方言の意味や用法について述べてみましょう。

シコタマは、数量が並外れて多いさまを表し、共通語ではどつさりとか、たくさんに当たる意味です。中高年者を中心に、今も広く使われています。

「今日はコトビ(祝日で特別な日)なんで、朝からシコタマ飲ンだり食ったりしたもんだから、腹がマータキチー(まだ堪えがたくつらい)よ」

どつさりためる、むやみやたらに貯(たくわ)えるという意味の語に、「しこためる」があります。シコタマはこの語が変化したものとされています。

ジッカ(二)は、どこもかしこも一面に満ちわたっているさまをいいます。「れんげの花が、どこの田んぼを見ても、ジッカ二咲いてるよ」ジッカ二は、小さな虫や物がたくさんいる(ある)という意味があります。

「いやー、毛虫が足の踏み場もネーほど、あちこちジッカにいらね」

程度がはなはだしく多いさまを表す古い方言に、オーゾ・カトーがあり、主として明治生まれの人たちが使っていました。今は死語となっています。

「子どもがフズブシ(踏みつぶし)たり、ポッコシ(壊し)たりしたら、オーゾイバツテ(叱つて)クンナンショ(ぐださい)」「忙しつてユーンで、稲刈りを助(す)けたら、米や野菜などをカトーもらっチャッタ」

(市民記者 森下喜一)

